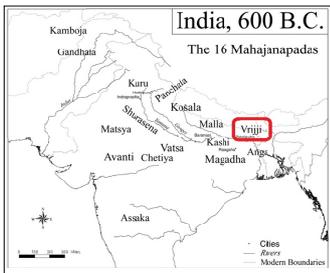




時宗布教伝道研究所研究員小田義宗
 今回は私たち日本仏教の根本である大乘仏教が誕生した第二結集(紀元前377年)の町、インド八大仏跡の一つ『ヴァイシャリー』です。



まずこの町を歴史的に見てみると、お釈迦様のご活躍された当時のインド十六大国の一つヴァツジ国(上図・赤枠)の都があった場所です。またお釈迦様もその布教の旅において、生涯もつと多くここを訪問し、死の直前にも訪れ最後の雨期を過ごしたと言われています。またお釈迦様がお亡くなりになってからすぐに行われた第一結集に続き、それから約百年後に再度比丘(僧侶)たちが集まりこの地で第二結集を行いました。しかしその時、互いの意見がまとまらず対立し(根本分裂)、今という北伝・大乘仏教と南伝・上座部仏教に大きく教団が分裂することになります。さてこの町の見所は、ほぼ



完全な形を残しているアショカピラー(以下ピラー)とその横に並び立つストウーパー(仏塔)があることでしよう。

紀元前3世紀ごろアショカ王によって北インド各地の仏教聖地に建てられたそれらピラーの基本的構造は、右写真のような高さ約10m・直径1mほどの円柱の上部に蓮の花の彫刻をほどこし、そのさらに上の柱頭上部にインドの伝承に基づく四聖獣(象・牛・馬・獅子)などの像を載せた建造

が静かに寄り添うように残るだけとなっています。そんな諸行無常をいやが応にも感じさせる風情を、現在のこの町は漂わせていました。

◆ もう一つの完全形ピラー

私が帯同したツアーでは、「もう一つの完全形ピラー」(左下写真)にも行くことができました。しかし残念ながらそこへは、通常のツアーではまず行くことが出来ないと思います。もったいぶっている訳ではありませんが、そこにたどり着くにはかなりの覚悟が必要で、インド人もびっくりの僻地だったからです。その場所は、ラウリア・ナンダガル(ナンダガル遺跡)と呼ばれていましたが、ネット

で調べてもそのピラーの画像等は、なかなか発見できません。それもそのはず、涅槃の地クシナガラからバスではなく4WD車に乗り換えて、ただひたすら未舗装道路を5時間ほど走った先にそれはあったからです。しかしその僻地さゆえに、おそらくイスラムの破壊者もこの地までとはたどり着くことができず、風雨等の自然災害に耐えながら、悠久の歴史を静かに見守っていることができたのでしょう。



として栄え、お釈迦様も「バ イシャリーは美しい。」とまで言わしめた場所ではありませんでしたがその後は荒廃し、現在は田園風景の広がるのどかな大地に、このピラーとさらにその近くに巨大なストウーパー

物となっっています。しかしその後の自然災害やイスラムの侵攻によって、その柱頭上部の彫刻像のほとんどは落下してしまいました。しかし現在のインドの中で2ヶ所だけその像が残るピラーが今なお存在しており、その一つがこのヴァイシャリーのものになります。この町に至るまでも、何ヶ所かでピラーを見ることができましたが、やはり完全形のものには感激しました。しかしこの町も過去には都